A New Microscopic Method for Measuring the Viscosity of a Liquid.

By

Fumio Hirata.

(Laboratory of Colloidal Chemistry, Kiriu Higher Technical School.)

Abstract.

The purpose of this article is to present a new method for the measurement of the viscosity of liquids, with special application to the viscosity of thick colloidal solutions.

I. Theoretical.

Given the linear flow of a liquid in a capillary tube with a radius of R and a length of l under a pressure of P, the following equation is used to express the velocity of the flow v, at a distance r, from the axis of the capillary tube :

$$\mathbf{v} = \frac{\mathbf{P}}{4 \ln \eta} (\mathbf{R}^2 - \mathbf{r}^2)$$

where η is the viscosity.

Putting r=0, we have the viscosity of the flow on the axis of the tube, v_0 ,

$$v_0 = \frac{P}{4l\eta} R^2$$

and therefore,

$$\eta = \frac{PR^2}{4^{lv_0}}$$

Now τ_1 will be determined by the measurement of v_0 if R, 1 and P are known. The new method of the measurement of τ_1 is based on the direct measurement of v_0 by a microscope. To determine the viscosity of a liquid, we mix with it a certain number of fine particles of a solid substance that does not chemically react on the liquid, and, by means of a microscope, measure the velocity of the particle moving with the liquid along the axis of a capillary tube. The velocity of the particle thus obtained must represent the velocity of the liquid on the axis of the capillary tube.

There the following points were discussed :-

- (1) The measuribility of the magnitude of v_0 .
- (2) The measurable range of η by this new method.
- (3) The method of the measurement.
 - (a) Selection of a particle in the field of a microscope.
 - (b) Quantity of the mass of the particles to be mixed.
 - (c) Radius and number of the particles mixed.
 - (d) Distance of falling of the particles during the measurement.

And then it was concluded that this microscopic method of the measurement is possible.

-(原 報)—

(平田) 願意鏡的方法による液體粘度測定法

II. Experimental.

1. Apparatus.

A measuring tube to be filled with a liquid is given in Fig. 1, and the whole arrangement of the apparatus in Fig. 2. In Fig. 2. AB is the measuring tube, M a microscope equipped with an ocular micrometer, and P and Q equipment to produce the pressure.

2. Procedure.

After a sample with fine particles is placed in the measuring tube, the arrangement is set up as shown in Fig. 2. Then the microscope is focussed on the axis of the tube so that the image of the axis comes just upon the scale of the ocular micrometer in the field. Turning the stop cock. H. we lead the pressure, p. which is previously prepared by the equipment, P and Q, to the tube. After the selection of a particle moving along the axis in the field of the microscope, the velocity of the particle is measured by means of the scale of the ocular micrometer and a stop watch. In the same manner, the determination of the velocity is repeated at different pressures. By plotting the pressure, p, and the velocity, v₀, on the rectangular co-ordinates, we get a straight line as in Fig. 3-9. If we put an equation p=a+b for this straight line, the coefficient, b, will be expressed by the principle of the method of the least squares, as follows;

$$b = \frac{n \sum_{i=1}^{n} p_i v_{0_i} - \sum_{i=1}^{n} p_i \sum_{i=1}^{n} v_{0_i}}{n \sum_{i=1}^{n} v_{0_i} - \left(\sum_{i=1}^{n} v_{0_i}\right)^{\frac{p}{2}}}$$

From this value of b, the value of η is given by the following equation :

$$\eta = \frac{R^2}{4!} \frac{P}{v_0} = \frac{R^2}{4!} \cdot b = \frac{R^2}{4!} \frac{n \sum_{i=1}^{n} \sum_{i=1}^{n} \frac{v_{0_i}}{i=1} \frac{\sum_{i=1}^{n} \frac{v_{0_i}}{i=1}}{n \sum_{i=1}^{n} v_{0_i} - \left(\sum_{i=1}^{n} v_{0_i}\right)^2}$$

where n is the number of measurements.

The result of the test shows that this new method can be employed for the measurement of viscosity—especially of a liquid of very high viscosity.

The following advantages were claimed for this new method :

(1) A small quantity, only a few cc. of the sample is required.

(2) The measurable range is ample.

(3) This method requires no determination of the density of the sample.

(4) No special apparatus is needed.

(5) Since the viscosity anomality and the eddy flow, if existent, are recognized during the measurement, the normal viscosity is obtained. Jan., 1934.

報)

顯微鏡的方法による液體粘度測定法

不 H 攵 夫

旣に文獻に現はれて居る液體粘度の測定方法,測定裝置は甚だ多種多様であるが,大別すれば水 **平又は垂直毛細管よりの液の流出速度の測定によるもの。¹⁷⁵¹ 球體或は圓塔狀の物體の,液中に於** ける運動速度の測定によるもの、**/ー゙**) 共動の二圓筒間に液を充し其の一つを廻轉せしむることによ りて起る他の国筒の廻轉角度の測定によるもの,^{50~40}液中に球、 圓鑄或は圓盤を垂下し其の液中に 於ける廻轉振動を測定するもの、65、~54)及び共他特殊な方法, 75)~57)が用ひられて居る、此處に提出せ

R: **Γ** 3 Signebic **27** 4 0 **E** 0 **C** 0 **C (C)** 4 (12) 177 **(C) (C) (C)** Poiseuille, Comft. rendu., 15, 1167 (1842). 2) Wiedemann, G., Pogg. Ann., 99, 221 (1856).

-(原 報)-

(平田) 類微鏡的方法による液體粘度測定法

んとする新測定法は其の原理に於てこれ等とは異り且つ種々の點に於て特徴を持ち、濃厚膠質溶液 の如き粘稠なる液體の粘度測定には、特に有效なものと考へられるものである。

理 論

新測定法の原理は簡單である、測定せんとする液體を一定長の毛細管中に、一定の壓力によつて 流動せしめ、該毛細管の軸に於ける流動速度を直接網微鏡下に測定し該液の絶對粘度を決定するに ある、理論式の誘導は Poiseuille の法則の誘導と同一であつて、即ち、辷りもなく、又渦流も起さ ない状態で液が毛細管内を流動する時、管の半徑を Rとし、共の長さを l, 軸より r の距離に於ける 液の流動速度をv, 流動を起さしめて広る、毛細管兩端の壓力の差を P どすれば此等の間には次の關 係が與へられる.⁸⁵

$$v = \frac{1}{4i\eta} (R^2 - r^2) \cdots (1)$$

但し 7 は液の粘度である。従つて r=0 とすれば毛細管軸上の流動速度が與へられる。 之れをv で示せば,

$$v_0 = \frac{PR^2}{4l\eta}$$

従つて,

4

若し P, R, 1 を知り, vo を測定し得れば 7 の値は決定し得る筈である。實際に, P, R, 1 の値 の測定には問題は起らない, 唯, vo は如何にして測定するか, 或は又, vo は測定可能な値である か如何かい問題である。此等の點に就き吟味する必要があるであらう。

I. v_0 は測定可能な値である 今液の粘度を10(絶對單位)とする. これはグリセリンの常温に於ける粘度の程度である. 毛細管の半徑を0.05 cm, 共の長さを10 cm として此等の値を(3)式に入れ、 ば $v_0=0,0000625.P$ となる. P を水柱で加壓したとして, 共の高さhとすれば $v_0=0.0613h$ となり v_0 と h との關係を求めると第1表となる. これによれば水柱 1/100 cm より100 cm 迄の熈力の下で

h cm	v cm/sec
0.001	0.0000613
0,01	0,000613
0.1	0.00613
1	0.0613
10	0.613
100	6,13

は、若し顯微鏡を用ひ其の接眼マイクロメーターによつて測定を行 へば速度の測定は可能であることが知れる。何となれば顯微鏡視野 中での移動距離は vot であるから、(但しては移動に要する時間)今 =1000sec とすれば vo の最小の値さへ測定は可能である。vo の大 きい値に對しても、t を小さくすれば同じ正確度で h=0.1程度迄は 測定し得られる要するに、半徑0.05 cm の程度で低に測定可能な値で あるから半徑、及び長さ、を加減し、加壓を加減することによつて vo の値は常に測定可能な範圍にもたらすことが出來る。即ち顯微鏡 的方法によれば vo は測定し得らる、値であることが分かる。

II. 7の測定可能な範圍

(3) 式中 P, R, 1のに對し裝置並に操作上許容される値の極限を導入することにより測定可能な η の範圍を決定して見る.

報)-

-(原

88) Brillouin, M., " Lecons sur la viscosité des liquides et gas", (1907), t. 1, p. 75.

(平田) 顕微鏡的方法による液體粘度測定法

	ii)	(極小値)	(極大値)
R		0.01cm	0.5cm
1	*********	5cm	20cm
Р		1cm(水柱)	150cm(水銀柱)
Va	••••	0,00005cm/sec	0.005cm/sec

以上の條件の下で測秒計を用ひて測定するとして正確度0.001以内で決定し得る y の値は次の数 字を與へる。

極小値	2.4×10^{-1}	(絕對單位)
極大值	$5.0 imes 10^{6}$	(絕對單位)

故に範圍は10°である.

試みに同一條件の下で Ostwald 型毛細管粘度計により測定し得る範圍を求めて見る。流出液量を 5cc とし流出時間を極小値50sec とし極大値1000sec とすると、次の数値を興へる。

極小値	3.9×10^{-6}	(絕對單位)
極大値	$1.9 imes 10^2$	(絕對單位)

又, 球體落下法の場合, 次の條件とすれば,

	(極小値)		(極大恒)
球の半徑	0.1cm		0.5cm
落下に要する時間	100sec		1000sec
球の密度	1.06	ж	16.6

。尙,液の密度を1,落下距離10cm として Ladenburg の補正式⁹⁰,によつて計算すると次の數字を 與へる。

極小値	$1.4 \times 10^{\circ}$	(絕對單位)
極大值	6.5×10^{6}	(絕對單位)

尚實際上, 球體落下法に於ては密度の異なる完全な球體を得ることは困難である. 故に, 市場に 容易に得られるボールペアリング用鋼鐵球を用ひるとすれば

極小値	1.6×10^{2}	(絕對單位)
極大値	$2.8 imes 10^{\circ}$	(絕對單位)

以上を比較すると毛細管粘度計は低粘度の液體の粘度測定に便であり顯微鏡的方法によれば高粘 度のものに便であること、範圍は後者は最も大であることがわかる.

III. v。の測定法

v。を顯微鏡的方法によつて測定する實際的方法は次の如くする、豫め液中に微粒子を混和し充分 均一に分散せしめ之れを毛細管中に充し粒子中毛細管の軸上にあるものを顯微鏡中にて選定しこれ を目標とし接眼マイクロメーターと測秒計により移動速度を測定する。從つて添加される微粒子の 性質、分量、並に其の半徑につき吟味する必要がある。

(a) 粒子の選擇 試料の液體と化學作用の全く起さなく又溶解作用を受けない固體物質の微粒子 を使用すべきであつて例へば, Carbon, Platinum, SiO₂, Glass, Al₂O₃, SiC 等の微粒子は之の目的に そふものである. 其他試料の種類によつて適當な微粒子を選定すればよい. 尚粒子による吸着作用 も考へられるが, 後述の如く,添加量が微量であるから此の問題は無視出來る. 試料が純粹液體であ

89) Ladenburg, R., Ann. d. Physik., 22, 287 (1907).

---(原 報)-----

る場合は勿論此の心配は不要である。尚粒子は膨潤作用をも受けないものでなければならない。

(b) 微粒子の添加量 微粒子の添加により粘度に及ぼす影響については次の如き結果になる。 假 に今試料の粘度 5 が微粒子の添加の為に 1 に變じたとすれば,同一の毛細管,同一の懸力によつて 測定を行ふとすれば式(2)により次の二式を得る。

$$\gamma = \frac{K^2}{4 l v_0}$$
(3)
$$\gamma' = \frac{R^2}{4 l v_0'}$$
(4)

然るに分散系の y'と分散媒の y との間に Einsterin の與へた關係⁶⁰が成立するから,

$$\eta' = \eta \quad (1 + 2.5\varphi)$$

式中 9 は分散系全容積で分散粒子の占むる總容積を割つた値である.(3),(4),(5)により v₀=(1+2.5*p*) v₀

従つて

R

$$\mathbf{v_0}' = \mathbf{v_0} \left(\frac{1}{1+2.5\varphi} \right)$$

故に

$$\frac{\mathbf{v_0'} = \mathbf{v_0} \quad (1 - 2.5\varphi)}{\mathbf{v_0'} - \mathbf{v}} = -2.5\varphi$$
$$\frac{\Delta \mathbf{v_0}}{\mathbf{v_0}} = -2.5\varphi$$

分散系100c.c. 中にある微粒子の量を mg とし、其の密度を μ とすれば、

$$\frac{\Delta v_0}{v_0} = -0.025 \frac{m}{\rho}$$

m=0.01g とすれば第2表の示す關係となる.

ρ	Δv _a v _a
0.5	0.0005
1	0.00025
2	0.00013
3	0.00008
4	0.00006
5	0.00005

vo の測定が既に述べたる如く 1/1000 の正確度で行なはる、ものと すれば m=0.01g にて既に 第2表に於ける ρ の値のいづれに對して も正確度以下の $\frac{\Delta v_0}{v_0}$ となるを以て,粒子の速度を粒子のなき時の 速度と採つて差支へない。若し $\rho=3$ をとるとすれば m=0.1gにて も、既に測定誤差の範圍内となるのであるから此の量まで使用は許 されることになる。

(c) 粒子の半徑並に其の個數 添加される粒子は顯微鏡下にて目標とするに足る半徑を必要とし,且つ粒子數は毛細管軸上に選擇するに充分なる粒子數を含むべきである。今 1mm³ 中に100個の粒子が散在するとすれば軸上 1mm 上に10個の割の確率を以て粒子は存

在する筈であるから目標の選定には充分な個數である。斯かる密度に分布させるには次の如き半徑 の粒子を使用すべきである。

$$r = \sqrt[3]{\frac{3}{4} - \frac{m}{\pi \rho n}}$$

式中nは 1cm³ 中の粒子數, r は粒子の半徑, mは粒子の總質量, µ は共の密度を示す。

90) Einstein, A., Ann. d. Physik, (4), 19, 289 (1906).

——(原 報)——

m=0.01g, p=1, n=10⁶ とすれば, r=0.0029cm, となる。即ち粒子の半徑 3/100mm 程度のものを 0.01g/100cc. の割に添加すれば充分に粒子数が含まること、なる,又前項 (b) の條件も満足すること、なる。尙實際に於ては液を流動きせつ、選定し得らる、故粒子数は此の計算より遙かに少くとも實測には不便はない。

(d) 測定時間中に起る目標粒子の沈降距離 測定時間中目標粒子が重力の為に沈下する結果類 微鏡明視距離外に逸する可能性につき吟味を必要とする、密度 ρ₁ 粘度 η の液中で密度 ρ₂ 半徑 r の 球體が t 秒間に沈降する距離 x は Stokes の法則により次式で示される。

$$x = \frac{2}{9} - \frac{r^2}{7} (\rho_2 - \rho_1) g t$$

今水中に於けるカーボランダム粒子の場合として $p_4=3.5$ 、 $p_1=1$ 、 $\eta=0.01$, r=0.0005cmとすれば t=1000sec 中に沈降する距離 x=0.014cm を與へる、r=0.0001cm なれば x=0.0003cm, 故に此の 場合粒子の半徑は 0.0001cm 即 1 μ のものを使用する必要がある。液が Glycerine の程度の η であれ ば粒子は 0.01cm 程度で充分である。 逃しく粘稠な液體では此の問題は考慮に入れる必要のない程 度である。

以上の吟味により微粒子を目標とする顯微鏡的方法による液體粘度の測定は可能な方法であると 結論し得られる。

尚實驗方法測定結果につき述べる前に、此の測定方法の特徴とすべき諸點を列撃すれば下の通り である。

(1) 少量の試料で測定し得られること、適當な装置によれば数立方種の試料で充分である。

(2) 測定の可能な粘度の範圍は廣い.

(3) 試料自體の密度の測定を必要とせない. 元來粘稠な液の密度の測定は甚だ實驗的に困難であるから,此の見地から見て此の測定法は甚だ有效な方法と云ひ得られる.

(4) 特殊の測定器械を必要とせない。

(5) 測定中に粘度の異状性、渦流の存否を直接に認め得らるい故従つて正規な粘度を得られる。 等の點である。

行

I. 測定裝置

測定用容器は硝子製にて第1圖に示すが如きものである。水平部分は長さ約 10cm の毛細管, 垂 直開管は内徑 15mm 高さ約 5cm である。測定装置全體の略圖は第2圖に示した。圖中 AB は測定 用容器, Mは接眼マイクロメーターを設へた圖微鏡である。S は光源であつてライツ製, 圖微鏡寫 質撮影用自熱電球使用の光源を用ひた。F は前記光源用緑色フイルターであつて熱線吸收を兼ね目 標粒子の陰影を濃厚にし鮮明な像を作る目的で使用した。毛細管 ABの中央部Cはバルサムを以て 小硝子片を毛細管の上下部に糊着せしめた部分であつて毛細管の表面の曲面の為に光源より導びい た平行光線が其の平行性を亂さるゝを防ぐ目的であり、目標粒子の輪廓を明瞭にせんが為に使用し た。D は硝子製三路活栓, N は液柱脈力計, P;Q は加壓用の水溜であつて P は固定され、Q は微 動螺旋により上下せしめ得るものである。E, F₂ は試料の蒸發濃縮或は吸温を防ぐ目的のもので試 料と同一液を容る1 硝子球である。Glycerine を試料として行つた 第1回,第2回の實驗は容器は室 内濃度下にて行つたが,第3回の實驗では測定容器は恆濃槽中に入れて行つたが其の場合, 顯微鏡の 對物レンズは平面な底面を持つ硝子製小形風筒, K, をかぶせて恆温槽中に浸して測定を行つた。

---(原 報)--



N. P. Q 中の液は純水を使用するが必要に應じて水銀を使用すればよい。

II. 測定操作

目標用粒子を均一に分散せしめた試料を測定管 ABに充し 第2圖の通りに連結を行ふ。次いで顯 徴鏡視野中にて目標粒子の選擇を行ふのであるが其の賃には毛細管の軸の位置を視野中で決定せね ばならない。先づ軸に直角の方向に接眼マイクロメーターを置き毛細管内孔の兩壁端の像により非 の中心軸の位置を目盛上に定め此の位置に顕微鏡を停め次いで接眼鏡を直角にまわし接眼マイクロ メーターの目盛の位置と中心軸とを一致せしめる。次に顯微鏡を垂直方向に上下せしめながら毛細 管内壁の上端部と下端部に焦點を合せ顯微鏡附屬の微動螺旋上の月盛の讀みをとり,上下の讀みの 中間の値に顯微鏡を固定する。折くて顯微鏡は毛細管の軸に焦點を結ぶ位置とたる。従つて此の位 置に於て中央に明確に認められる粒子は軸上の粒子と認め得る。 次に D を開き毛細管中に液を一 定歴の下にて徐々に流動せしめつい適當なる目標粒子の類はれるを待つ。目標粒子が接眼マイクロ メーターの目盛の一端に近づけばこれが目盛中の二定點、を通過する時間を測秒計によつて測定し 後歴力計の讀みを取り同時に出。の溫度を讀み取る. 同一の壓力の下で數囘の測定を行ひ粒子の示す 速度が同一の値にして且つ最大の値を與へるものを得るまで行ふ。後、加壓を變じ同様の測定をな す。流動は一方向のみならず反對方向の流動をも測定する。之の操作を行ふ理由は次の點にある。 元來液の流動に作用して居る壓力は,壓力計に顯はれる値火でない。それ以外に液自身の兩側管に 於ける水準差に原因する壓力も流動を起す作用にあづかつて居る筈である。 多くの場合 D を閉ち た狀態では兩側管の水準は等しくはなつて居らない。殊に試料の粘度の表だしく高い場合、兩側管 A.B の水準は等しくなり難いばかりで無く兩液面は不規則な曲面狀態を呈して居り, 正しいメニス カスになるには可なりの時間を要する場合が稀でない。故に之の液自身の水準差による壓力の値を 決定する必要がある。 壓力計の示す壓が正或は負の値の下で失々の流動速度を求めて崩者の値 pr. p....p. に對して vo., vo., vo., ・・vo., を得たとする, 之れを p. v を座標軸とする闘表を求めて見る と直線を得られる。 之の直線は一般に原點を通過せない。即ち p 軸上に之の直線が交叉する點の

—(原 報)—

示す原點からの距離が、丁度、前記液自體の水準差に原因する壓力の大きさを示すのであつて、測定中は、之の値は、實際上、一定であると認められる。簡單な計算で、之の値が一定をとつてよい事が容易く分かる。即ち假りに毛細管の半徑を 0.05cm、側管の半徑を 1.5cm とし測定回数は10回 とし各 × 一回の測定に 1分を要したとすると、全測定時間中に液が一方向にのみ移動すると假定し ても、共の移動容積は $V = \frac{\pi r P t}{8 t}$ であるからR=0.05cm、P=10⁵ dyne/cm², l=10cm, γ =10, t=600 scc とすれば V=1.47×10⁻²cm³となる。從つて側管に起る液の水準差の増減 Δh =2.00×10⁻³ cmと なり壓力計讀取りの際の測定誤差の程度となる。實際には、液の移動は雨方向に行はれるから、之 の値は尚小さくなる。即ち側管水準差による壓は測定中變化なしと取り扱つてよいのである。

さて、前述の如く p.v。の關係は直線となるが(勿論式(2)の示す如く理論的にも然るべきである が)式(2)に於ける P は次の二つの壓力の代數和である。即ち

 $P = p + p_{rig}$

pは悪力計の示す値であり pug.は液の水準差による値である。p及 pug.の±の記號の採り方は目 標粒子を同方向に動かす様に作用するものを同じ記號とすればよい。今實驗結果より計算を進むる 式を求めて見る。p,va の關係を一般の直線式をとり、

 $p = a + bv_0$

と置く。但し此の際aは pin,に相當するものであり慎數と置き得らる い。b も慎數であつて之の値 は測定値より決定する必要のあるものである。最小二乘法によつて條件式を造る。

$$\frac{\partial}{\partial a} (p - a - b v_0)^2 = 0$$

$$\frac{\partial}{\partial b} (p - a - b v^0)^2 = 0$$

従つて,

$$\begin{array}{c} \mathbf{p} - \mathbf{a} - \mathbf{b} \mathbf{v}_0 = () \\ \mathbf{p} \mathbf{v}_0 - \mathbf{a} \mathbf{v}_0 - \mathbf{b} \mathbf{v}_0^2 = () \end{array} \right\}$$

h 個の測定値によつて次の式を得る.

$$\left. \begin{array}{c} \sum_{i=1}^{n} \mathbf{p}_{i} - \mathbf{n}\mathbf{a} - \sum_{i=1}^{n} \mathbf{v}_{0_{i}} = \mathbf{0} \\ \sum_{i=1}^{n} \mathbf{p}_{i} \mathbf{v}_{0_{i}} - \mathbf{a} \sum_{i=1}^{n} \mathbf{v}_{0_{i}} - \mathbf{b} \sum_{i=1}^{n} \mathbf{v}_{0_{i}}^{2} = \mathbf{0} \end{array} \right\}$$

これよりbを求めて,

$$\mathbf{b} = \frac{\sum_{i=1}^{n} \mathbf{p}_{i} \sum_{i=1}^{n} \mathbf{v}_{0_{i}} - \mathbf{n} \sum_{i=1}^{n} \mathbf{p}_{i} \mathbf{v}_{0_{i}}}{\left(\sum_{i=1}^{n} \mathbf{v}_{0_{i}}\right)^{2} - \mathbf{n} \sum_{i=1}^{n} \mathbf{v}_{0_{i}}^{2}}$$

斯くしてbが與へられいば求むる粘度 η は、式 (2)によつて、 $\eta = \frac{R^2}{4l} \frac{P}{v_0} = \frac{R^2 (p-a)}{4lv_0} = \frac{R^2}{4l} b$

であるから、

$$\eta = \frac{R^2}{4l} \frac{\sum_{i=1}^{n} p_i \sum_{i=1}^{n} v_{\theta_i} - n \sum_{i=1}^{n} p_i v_{\theta_i}}{\left(\sum_{i=1}^{n} v_{\theta_i}\right)^2 - n \sum_{i=1}^{n} v_{\theta_i}^2}$$
$$--(\underline{K} + \underline{K}) ---$$

として計算決定される.

III. 實驗材料及び測定條件

實驗の試料として用ひた液體はグリセリン、及び醋酸纖維素アセトン溶液であつて前者は市販の プライス製最純グリセリンを用ひた、實驗番號(1),(2)に用ひたものは D^{ng}=1.2506 の密度のもの 實驗番號(3)で使用したグリセリン No. II は D^{ng}=1.2532 の密度をもつ、醋酸纖維素アセトン溶 液は市販の醋酸纖維素(Cellit L:低粘度)(獨逸製)を乾燥せるものを使用す、之を再觸脫水せるア セトン中に適當量溶解せしめ遠心機に約5時間かけ、固形物を除きたるものを使用した.濃度はこの 溶液より一定量を採り減壓乾燥せしめ秤量して決定した、實驗番號(4),(5),(6),(7) に使用したも のは此の溶液であつて、濃度は 15.90%である.

目標粒子として使用したものは炭素粒子とカーボラングム粒子であつて、前者はベンゼンを燃焼 せしめて作つた煤煙を二硫化炭素にて洗滌脫脂し、約300°C にて減硬乾燥したものを使用した。粒



子の大きさは直徑,約 1/10mm~1/100mm の程度 である- 後者カーボランダム粒子は市販の研磨用 カーボランダム粉末を水中に懸垂せしめ適當な時 間の後中間液層を集め粒子の直徑 1/50mm~1/500 mm の附近のものをとつた.之の粒子は濃鹽酸,稀 鹽酸を用ひて洗滌し、遠心機により液と分離し、 再びアンモニアにて弱アルカリ性とし遠心機を使 別しつ、水洗して乾燥せしめて使用した.

其他の實驗條件は次の 第3表に記載した通りで ある。

Table III 測定條件

實驗番號	1	2	3	4	5	6	7
試 料	グリセリン No. 1	グリセリン No.]	グリセリン No. 2	儲酸 繊維素 アセトン溶液	・4と同一溶液	同左	同左
毛细管	第1號 R=0.040cm l=9.96cm	同左	间左	同左	同左	R = 0.0545 cm 1 = 9.91 cm	R = 0.0965 cm l = 9.94 cm
目標粒子	炭素粒子	同 左	同左	カーボランダ ム粒子	同左	同左	同左
同上添加量	0.1g/100c :	0.01g/100cc	0,1g/100cc	0.2g/100cc	0.2g/100cc	0.2g/100cc	0.2g/100cc
测定温度	室內溫度下	同左	25.00°C±0.01	30.0°C±0.1	26.4°C±0.1	26.4°C±0.1	$26.4^{\circ}C \pm 0.1$
室內溫度	30°C	30°C	20.0°C	25,0°C	29.5°D	29.5°C	28.0°C
備考			恒温槽中にて 測定	簡単なる水槽 中にて測定	词 左	同左	同左
實測數值表	第4表	第5表	第6表	第 7 表	第8表	第9表	第 10 表
p->。圙 表	第3圖	第4圖	第5日	第6日	第7間	筑 8 圖	第9圖

IIII. 測定結果並に其の吟味

10

---(原 報)----

I. 目標粒子の添加量の粘度に及ぼす影響

崩述理論の項 III, 6) に於て吟味せる點即ち目標粒子の添加量の液の粘度に及ぼす影響に就き次の如き測定を行ひ次の結果を得た。

(i) 目標粒子を添加しないプライス製グリセリン No. 2 を使用し普通の毛細管粘度計を用ひて流 出時間を測定した,其の結果は次の通りの数を與へた。

測定溫度:25.00°C±0.01 (積溫槽中)

流出に要した時間: ① 19.34.1

- 2 19.35.7
- (a) 19.35.9
- 19.35.5.

以上の平均値 19.35.3

(ii) 同一のグリセリンに、ベンゼンより関し CS で脱脂し 300°C で減壓乾燥したる煤粉を100cc のグリセリンに對し 0.1g 添加せる分散系を同一の毛管粘度計によつて流出時間を測定したるに次 の数値を興へた。

測定溫度	25,00°C±0.0	I
流出時間:	n 19.36.2	2
	D 19.33.9	į
	3 19.35.0	į
	① 19.37.7	ĺ.
以上の	平均值 19.35.7	ſ

添加の為に増加した時間は0.4秒であつて流出時間1175.⁹³に對しては0.04%に當る。即ち目標粒子、 の添加の影響は此の場合粘度の測定誤差範圍であり充分無視し得る事を示して居る。

II. 顯微鏡的方法による粘度測定結果

(1) 室内溫度下に於ける測定

之れは試驗的に行つた測定である。實驗番號(1)及び(2)と示したもので第4表,第5表に共の結果 を示した。平均値として 𝑘³⁰ = 4.36(絶對單位)を得た。同一試料を用ひ Ostwald 式毛管粘度計によ り比粘度を測定し絶對粘度を求めて見ると 𝑘³⁰ = 4.54 を與へる。後者の測定は 30.0°C の恆温槽中 で測定した値である。兩測定値を比較すると、溫度の點で正確さは缺けるから數値の上では比較は 無理であるが此の顕微鏡的方法が測定方法として可能なものであることを示して居る。

(2) 恒温槽中での測定

前項試驗的測定によつて此の測定法の可能なることを認めたから確定的に行つた測定である。可 及的正確を期し、測定管を 25.00°C±0.01 の恒温槽中に入れ,壓力計は観測顕微鏡を用ひ0.01mm の 桁まで讀取つた.試料はグリセリン No. II を使用した。測定結果は實驗番號 (3) として第6表に示 した. 測定値は $\eta^{s^{s}}$ =5.93_a (絶對單位)である。

同一試料を同じ恆温槽中にて前項と同様に普通に、使用される毛管粘度計によつて水に對する比 粘度を測定し水の絶對粘度の値により計算して y^{55°}=5.93。(絶對單位)を得た.此の場合,水の流出 時間は 24.8。秒(平均値),試料の流出時間は13120秒(平均値),試料の密度は 1.2532 であり,水の密 度 D^{55°}=0.99707 を用ひ水の絶對粘度は y⁵¹₁°=0.008941の値,⁵¹⁾を採つて決定した.

91) Bingham, E. C., " Fluidity and Plasticity", (1922), p. 339.

----(原 報)----

(平田) 顕微鏡的方法による液體粘度測定法

兩數値を比較するに共の一致は完全である。但し小數位第二位の一致は偶然であると認められる 兩者の測定法共に時間の測定値の誤差は此の桁に於て現はる、筈である。共他の點に於ては誤差は 第四位にある筈であり従つて時間の測定値の測定秒數を増加せしむる様にすればより以上正確度を 増し得るのであつてこれは至難ではない。

此の確定的測定實驗によつて新測定法は其の正確さに於て粘度測定法として滿足な結果を與ふる ものと認め得られる。

(3) 醋酸纖維素のアセトン溶液の粘度測定

新測定法を用ひて膠質溶液の絶對粘度の測定を酷酸繊維素アセトン溶液に就て行つた、使用した 溶液の調製,濃度はL實驗材料「の項に於て述べたものである,測定は實驗番號(4)と示したもので結 果は第7表に與へた.

III. 測定管の毛細管部内徑と粘度測定値との關係に就ての實驗結果

測定器の毛細管部の内徑が異る時理論的には半徑の二乗として關係して來る筈であるが((3)式によつて $\gamma = \frac{R^2}{4l} - \frac{P}{v_0}$)同一液を用ひ、異つた半徑を持つ測定器を使用して此の關係が成立するや否やにつき實驗を試みた、實驗番號(5)(6)(7)はこれであつて結果は第8表,第9表,第10表,第11妻に示した.試料は醋酸纖維素アセトン溶液で前項と同一のものである。簡單なる水槽中に於ける測定放完全な結果を得られなかつたが第11妻によつて認めらるゝ如く $\frac{R^2}{1}$ とかの積はいづれの毛細管に對しても略一定數となり理論の要求する關係を示して居る.此の實驗も又顯微鏡的粘度測定法の可能なることを示して居る.

N ₀	い(櫃/秒)	₽ (ダイン/平方極)	vo²	P ^v o	例證	考
1	-0,006413	- 1133.0	0.00004113	+ 0.266	$\sum_{i=1}^{n} p_i \sum_{i=1}^{n} v_{0_i} =$	- 15.73
2	-0.001914	- 605.4	0.00000368	+1.159	$n\sum_{i=1}^{n} p_i v_{0i} = \cdot$	+ 81.34
3	-0.000161	- 410.1	0.00000003	+ 0.066	$\left(\sum_{i=1}^{n} v_{0i}\right)^2 =$	+ 0.000112
4	+0.004275	± 0.000	0.00001828	±0.000	$n \sum_{i=1}^{n} v_{0i}^{2} = +$	0.001044
5	+ 0.006678	+ 234.4	0.00004460	+ 1.565	$\frac{R^2}{4l} = 0.0000$	4016
6	+0.008144	+ 429.7	0.00006632	+3,500	$b = 1.043 \times 10^{-10}$	05
ո ∑ i≕l	+0.01061	- 1484	+0.0001240	+ 13.56	$\eta = 4.187$	
4		1. Mat i	まによる値	$\eta = 4.187$	(絕對單位)	
粘儿	在 浏 定 值	2. 毛管粘)	変計による値	$\eta = 4.541$	(絕對單位)	

Table IV

12

——(原 報)——















-(原 報)

			۰.
- 25			
	ĸ.	20	11
	x.		•

(平田) 顯微鏡的方法による液體粘度測定法

No	v₀ (糎/秒)	p· (ダイン/平方輝)	v _n 2	pv _o	備	考
Ţ	+0.007895	+429.7	0.00006233	+3.393	$\sum_{i=1}^{n} p_i \sum_{i=1}^{n} v_{0i} =$	- 17.50
2	+0.006256	+ 234.3	0.00003914	+1.466	$n \overset{n}{\overset{n}{\overset{n}{\overset{n}{\overset{n}{\overset{n}{\overset{n}{n$	+ 110.18
3	+0.003620	±0.000	0.00001310	±0.000	$\begin{pmatrix} n \\ \sum_{i=1}^{n} v_{0_i} \end{pmatrix}^2 =$	+ 0.00005664
4	+0.000862	-351.5	0.00007430	-0.3030	$n \sum_{i=1}^{n} v_{0i}^2 = -$	+ 0.001187
5	-0.001496	-624.9	0.00000224	+0.9348	$\frac{R^2}{41} = 0.0000$	94016
6	-0.003268		0.00091068	+2.732	$b = 1.130 \times 1$	05 .
7	-0.006413	- 1172	0.00004113	+7.516	$\eta = 4.53s$	
$\Sigma_{i=1}^{n}$.	+0.007526	- 2324	0.0001695	+15.74	•	
		1. 强微镜法	による値	$\eta = 4.53^{8}$	(絕對單位)
稻 度	测定值	 2. 毛管粘度 	計による値、	η = 4.544	(絕對單位)

Table V

Table VI

-

Nn	vo(糎/秒)	P (メイン/平方種)	v _o ²	Pv₀.	储	۵)	考
1	-0.001394	+ 59.71	0.00000194	-0.08384	$\sum_{\substack{i=1\\j=1}^{n}}^{n} p_i \sum_{i=1}^{n} v_{0_i} =$	= - 17.47	
2	-0.003000	-152.7	0.00000300	+0.4581	$n \sum_{i=1}^{n} p_i v_{0_i} =$	+ 214.35	
3	-0.003538	-243.7	0.00001252	+0.8623	$\left(\sum_{i=1}^{n} v_{0_i}\right)^2 =$	+ 0.0001	184
4	-0.004275	-331.8	0.00001828	+1.4185	$n \sum_{i=1}^{n} v_{0i}^2 =$	+ 0.00168	74
5	-0.005130	- 394.5	0.0002633	+2.0236	$\frac{R^2}{41} = 0.000$	04016	
6	0.006181	-560.9	0.00003820	+3.4666	$b = 1.478 \times$	105	
7	- 0,001016	+112.6	0.00000103	-0.1143	$\eta = 5.933$		
8	+0.001676	+ 533.5	0.00000281	+0.8944			
5)	+0.003054	+723.4	0,00000933	+2.2088			
10	+0.004171	+832.0	0.00001740	+3.4701	51 (* 81)	÷.	
IJ	+0.004750	+1028.0	0.00002256	+4.8820)•		
Σ 1=1	-0.010884	+1605.6	0.0001534	+19.486			
5. (21)		1. 顯微鏡沿	による値	$\eta = 5.933$	(絕對單)	ż)	
粘质	建 測 定 値	2. 毛管粘度	時による値	$\eta = 5.93^{\circ}$	(絕對單作	±)	

報)-(原

(平田) 顕微鏡的方法による液體粘度測定法

N ₀	^v o(糎/秒)	p (ダイン/平方種)	v _o ²	pv ₀	fili	
1	+0.008143	-254.2	0.00006631	-2.070	$\sum_{i=1}^{n} p_i \sum_{j=1}^{n} v_{o_j}$	= - 7.919
2	+0.004385	- 684.5	0.00001928	-3.001	$ \begin{array}{ c c c c c c c c c c c c c c c c c c c$	+ 76.80
3	+0.0l 05109	- 1085	0.00000026	- 0.5543	$\left \left(\sum_{i=1}^{n} \mathbf{v}_{0_{i}} \right)^{2} \right =$	= + 0.000002048
4	- 0.007600	-1946	0.00005776	+14.79	$n \sum_{i=1}^{n} v_{0i}^2 =$	+ 0.0007980
5	-0.004008	-1564	0.00001606	+6.196	$\frac{R^2}{41} = 0.000$	004016
n S (=1	+0.001431	- 5534	0.0003596	+15.36	$b = 1.064 \times$	105
-5.7	10		8 ⁸	粘度測定值	$r_1 = 4.274$	(絕對單位)

Table VII

•

.

N ₀	va(櫃/秒)	P ダイン/平方極)	*'o ²	pv _o	備 考
1	+0.003466	+449.3	0.00001201	+1.5573	$\sum_{i=1}^{n} p_i \sum_{i=1}^{n} v_{0_i} = + 32.70$
2	+0.902559	+253.9	0.00000256	+0.6497	$n \sum_{i=1}^{n} p_i v_{0_i} = + 295.60$
3	+0.002129	+156.3	0.00000453	+ 0.3328	$\left(\sum_{i=1}^{n} v_{\mathbf{o}_{i}}\right)^{2} = + 0.00005663$
4	-0.0002392	-420.0	0,00000006	+ 0.1005	n $\sum_{i=1}^{n} v_{o_i^2} = + 0.001151$
5	-0.001207	713.0	0.00000146	+0.8606	$\frac{R^2}{4l} = 0.00004016$
6	-0.002788	-986.5	0.00000777	+ 2.7504	$b = 2.403 \times 10^5$
7	- 0.01166	-3086	0.00013596	+ 35.983	
2 1=1 ·	- 0.007525	-4346	0.00016435	+ 42.23	*
				粘度测定值	η = 9.651 (絕對單位)

			. 03	
1	al) e		\mathbf{A}

No	v _o (糎/秒)	p (ダイン/平方極)	Vo ^g	pv _o	備	考
1	-0.006334	-1104.0	0.00004012	- 6.993	$\sum_{i=1}^{n} p_i \sum_{j=1}^{n} v_{o_j}$	= + 8.765
<u>0</u>	-0.003109	-693.5	0.00000967	+2.156	$n \sum_{i=1}^{n} p_i v_{0_i}$	= + 52.10
3	-0.0006503	-390.7	0.00000042	+ 0.2541	$\left(\sum_{i=1}^{n} \mathbf{v}_{0_{i}}\right)^{2}$	= + 0.00001934

-(原 報)——

A MARINE AND A MARINE A MARINE

15

5

1

$\begin{array}{c ccccccccccccccccccccccccccccccccccc$	
	.00007593
$\begin{array}{c c c c c c c c c c c c c c c c c c c $	4×10 ⁵

(平田) 顯微鏡的方法による液體粘度測定法

12.2	1213		
111	1.1	12.00	· • •
	n ni	A	
- 1 4			

No	v₀ (檀/秒)	Pa (ダイン/平方糎)	v0 ²	P*o	備	考
1	- 0.004499	+29.31	0.00002024	-0.1319	$\sum_{i=1}^{n} p_i \sum_{i=1}^{n} v_{0_i}$	= + 11.036
2	- 0.001936	+ 136.8	0.9000375	- 0.2649	$n \sum_{i=1}^{n} v_{0i} =$	= + 35.598
3	+ 0.0001494	+234.5	0.00000002	+0.03503	$\begin{pmatrix} \mu \\ \Sigma \\ \nu_{0_i} \end{pmatrix}^2$	= + 0.00004629
4	+0.001560	+302.9	0.00000243	+0.4725	n $\sum_{i=1}^{n} v_{0i}^2 =$	+ 0.0006186
5	→ 0.003514	+342.0	0.00001235	+1.202	$\frac{R^2}{41} = 0.00$	02342
6	+0.008016	+576.4	0,00006426	+4.620	$\eta = 4.222 \times$	104
n ∑ i=1	+0.006804	+1622	0.0001031	+ 5.933		
				粘度测定值	η = 9.887	(絕對單位)

Table XI

毛細管番號	(毛細管の長さ)	R (毛細管牛徑)	R²/I	Ь	$K(\approx R^{\circ}/l.b)$
1	9.96	0.0400	0.0001606	2.403×105	38.6
2	9.91	0.0545	0.0003037	1.274×10^{5}	38.7
3	9.94	0.0965	0.0009368	4.222×10 ⁴	39.6

絶 括

(1) 液體粘度の測定法に開し従来の方法と異なる擬微鏡的測定法を提出し其の可能性に就き吟味した。

(2) 該測定法に就き測定上の利點を列記した.

(3) 該測定法の測定裝置並びに測定操作に就き記述した.

(4) 微粒子添加による粘度に及ぼす影響に就き理論的關係につき實驗的に確めた。

(5) グリセリン及び醋酸纖維素アセトン溶液の粘度を新測定法により測定した。

(6) グリセリンの粘度に就き新測定法による測定値とOstwald 型毛管粘度計による測定値とを比

---(原 報)----

1

較吟味し新測定法の正確度を示した.

(7) 醋酸繊維素アセトン溶液の粘度測定により、粘度と測定管毛管部半徑との關係が理論と一致 する事を實驗により示した。

終りに臨み常に懇篤なる指導を賜れる堀場信吉教授に對し深厚なる感謝の意を表す.

尚本研究の費用は著者に與へられたる文部省自然科學獎勵金によるものなり,記して感謝の意を 表す.

又實驗につきて大門徹氏の助力に感謝す。

昭和9年1月7日

相生高等工業學校應用化學教室

——(原 報)——